但馬家畜市場

うっしっしい一情報2017

1月市

豊岡農業改良普及センター

１月１１日に行われましたセリ市全体の平均価格は、去勢が８６万、　雌が８１万２千円でした。

普及センター調べ（税込価格）

地域	去勢			雌			総計	
	頭数	DG	平均価格	頭数	DG	平均価格	頭数	平均価格
宍粟・佐用	16	0.941	853,740	7	0.866	742,269	23	819,814
篠　山	8	0.925	794,205	4	0.815	861,570	12	816,660
丹　波	24	0.937	859,725	18	0.828	735,120	42	806,323
朝　来	10	0.940	834,840	3	0.858	899,280	13	849,711
播　磨	13	0.919	831,268	12	0.872	715,320	25	775,613
美方郡	61	0.945	871,418	66	0.847	848,700	127	859,612
豊　岡	26	0.970	871,394	17	0.863	812,478	43	848,101
養　父	29	0.975	897,182	12	0.851	862,470	41	887,022
摂津・神戸	7	0.894	769,731	2	0.794	718,200	9	758,280
県北C	9	0.937	834,720	3	0.798	714,240	12	804,600
市場全体	203	0.946	859,770	144	0.848	811,883	347	839,898

1月市種雄牛ランキング

順位	種雄牛	去勢			雌			総計	
		頭数	平均DG	平均価格	頭数	平均DG	平均価格	頭数	平均価格
1	芳悠土井	32	0.989	913,950	26	0.850	827,363	58	875,135
2	照忠土井	38	0.941	883,639	35	0.842	826,755	73	856,366
3	丸宮土井	29	0.926	887,388	25	0.813	811,512	54	852,260
4	千代藤土井	33	0.985	863,051	8	0.889	745,335	41	840,082
	総計	203	0.946	859,770	144	0.848	811,883	347	839,898
5	芳山土井	37	0.921	806,439	36	0.885	838,350	73	822,176
6	丸富土井	8	0.865	752,895	2	0.810	714,420	10	745,200

価格は税込み　（10頭以上の出荷があった種雄牛のみ記載）

ランキング種雄牛の育種価

	種雄牛	枝肉重量	ロース芯面積	バラの厚さ	皮下脂肪厚	歩　留	脂肪交雑
1	芳悠土井	A+	A+ → A	A+ → A	B	A	A+++
2	照忠土井	B	A+++	A+	A+	A+++	A+
3	丸宮土井	B	B	A+	A++	A++	A++
4	千代藤土井	A	A+++	D	A+	A++	A++
5	芳山土井	A+	A++	A++	C	A+	A++
6	丸富土井	B	A+	D	B	A	A++ → A+

北部農業技術センター提供（育種価評価は平成28年7月現在）

冬場の増飼いをしていますか？

○はじめに

最近の家畜市場は、平均価格が８０万円以上と、空前の活況が続いています。出荷すれば、ほぼ高値取引が約束されており、繁殖農家にとっては絶好のチャンスです。一方で、「ええ値なんやけど、今月は出す牛おらへんわ・・・」との声も聞かれます。直近の 10 月市～12 月市に出荷された子牛は、昨年の 4～6 月に受胎した母牛から生産された子牛です（妊娠期間 285 日前+育成期間２４０～270 日前）。4～６月の繁殖成績は、その２～3 ヶ月前の冬場に分娩した牛が、順調に次産に向けての準備ができているかどうかがポイントとなります。そこで、今回は冬季分娩牛の増飼いについて考えてみたいと思います。

○基本的な飼料給与量を確認しましょう。

まず冬季の給与量を考える前に、基本的な飼料給与ができているか確認してみましょう。

確認１ 粗飼料は 5.0～5.5kg 給与していますか？

確認２ 配合飼料で繁殖ステージ毎の調節をしていますか？（図１）

維持期は１kg　分娩前２ヶ月　２～3kg　授乳期　3～4kg

上記の給与量は一般的な給与量ですが、意外と管理ができていない方がおられます。散見される実例として

実例１ 粗飼料を 3kg 程度しか給与していない。

→乾物量不足により、母牛が空腹を感じている。

実例２ 配合飼料を通年で 2kg 給与している。

→維持期では過剰、授乳期では不足となっている。

実例３ 複数人で管理しているため、１日の総給与量がわからない。

→給与量が把握できず、過剰給与になりがちで母牛が過肥となった。

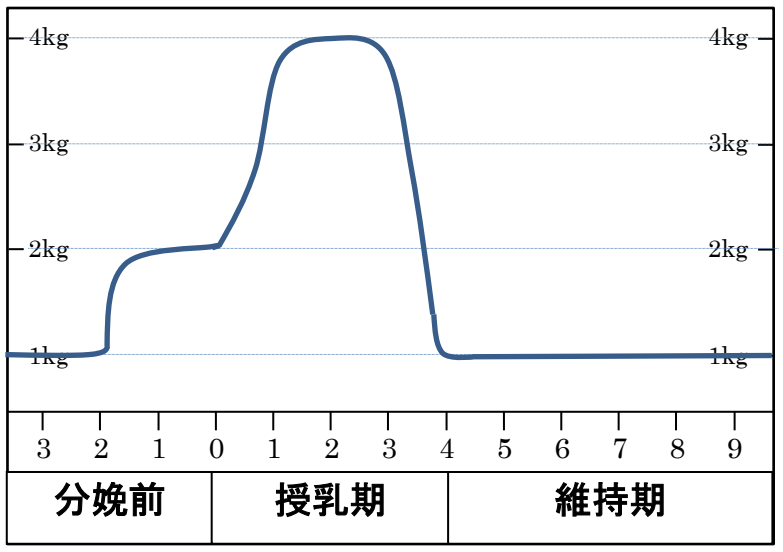

図１　配合飼料の給与量

☆冬場の増飼いをする前に、まず基本的な給与量が確保されているかを確認して下さい。

○なぜ冬場の増飼が必要なのでしょうか。

母牛に給与された養分がどのように使われているか考えてみましょう（図２）。給与された飼料のすべてを母牛が利用できるわけではありません。

特に冬場においては、①消化率が低下するためふん尿に排出されるエネルギーが増加し、利用可能なエネルギーは減少します。さらに、②体温維持などのための代謝量増加が行われるため、母体の維持に使われる必要量は増加します。気温が 5℃を下回ると、18～25℃のときと比較して必要量は 30～４０％増加します。さらに、妊娠末期牛や分娩牛では、胎仔の発育や母乳の生産に使われるため、冬季分娩牛への増飼が必要となるのです。

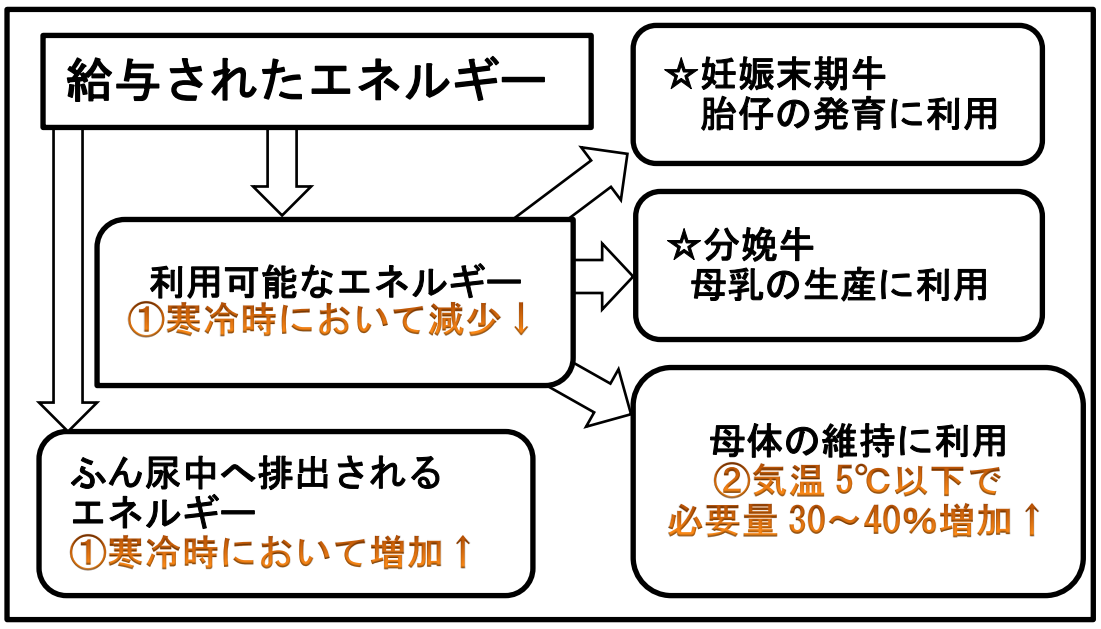

図２　給与されたエネルギーの流れ

○冬季分娩牛の増飼を行いましょう

それではどのくらい増給すれば良いのでしょうか。母牛の体重が 400kg、維持エネルギーの増加を 30％とすると、維持に必要なエネルギーは 2.76kg です（表）。その 30％となると、2.76kg×0.3 ＝ 0.828kg となります。繁殖用の配合飼料の TDN は７５％程度なので、飼料の現物量では 0.828kg／0.75＝1.1kg となります。実際には 1.0kg 程度の増給となります。

体重	可消化養分総量（TDN）
400kg	2.76kg

表　成雌牛の維持に要する養分量
日本飼料標準（肉用牛）2008 年版

◎まとめ

▷冬場では、飼料の消化率が低下し、利用できるエネルギーが減少する。

▷気温 5℃以下では、18～25℃のときと比較して、維持に使われるエネルギーが 30～40％増加する。

▷冬季分娩牛には、配合飼料を 1kg 程度増給する。